〈青森県史〉の窓 16

江戸時代の道路事情

石塚雄士
（県民生活文化課県史編さんグループ）

正月というと毎年帰省ラッシュのニュースが流れ、今年の正月もふるさとで久しぶりに懐かしい顔とめぐり会ったという方も多いと思われる。青森県では雪で不便を強いられるとはいえ、現在は鉄道や高速道路などが整備され、どこに行くにも安全で迅速な旅が楽しめる時代となっているが、江戸時代には旅は相当の覚悟が必要なものであった。

今回は当時の県内の道路事情がどのようなものであったのか、幕府の定めた幹線道路、いわゆる「五街道」の一つである奥州街道を例として見ていきたい。

「蓑ヶ坂」付近
（大日本国東山道陸奥州駅路図：青森県立図書館蔵）

奥州街道は、江戸から東北地方の太平洋側を北上して本県に入り、県内では三戸と七戸の周辺を除いておおむね現在の国道4号線に近いルートをたどり、油川で日本海側を回ってきた羽州街道と合流三厩まで至る街道である。街道沿いには一里塚や、馬門と狩場沢の間には盛岡藩と弘前藩の藩境を示す藩境塚が築かれたほか、馬門や狩場沢・野内には盛岡藩と弘前藩の番所が置かれて旅人の往来や物資の移動が厳しく監視されていた。

さて、そのような幹線道路であれば、よく整備された広い道の両側に松並木が続いているという、安藤広重の「東海道五十三次」に描かれているようなイメージを持たれる方もいらっしゃるだろう。

しかし、江戸時代初期の奥州街道の状況を記した史料を見ると、県内には青森から野内までのように、砂浜を通るため「如何程の往来も罷成候」という場所もあれば、野内と浅虫の間にある「うとふ坂」や「とうまひ坂」のように道幅一間～二間（約1.8～3.6m）という場所や、「道広サ壱間、せまき所ニて三尺」（約1.8m～0.9m）という三戸から岩手県にかけての「蓑ヶ坂（みのがさか）」など、道幅も狭く、急な坂が連続する難所が各所に存在していた。

さらにそのころは橋が架かっている川が少なく、多くの川では徒歩や船での渡りを強いられ、「少之雨ニも水出、人馬不通」という場所も少なくなかった。まさしく当時の本県を通る奥州街道は「奥の細道」だったのである。

その後、江戸時代も半ばを過ぎる頃にはこのような状況も徐々に改善され、川では橋の整備が進み、自然のままの砂浜を通っていたような場所でも街道としての体裁が整えられるようになる。そして原野を横切る街道筋に、風雨を防ぎ、雪中でも方角を見失わないようにと柳や松の並木が植えられるに至って、我々が抱くイメージに近い街道の姿が形作られていったのであった。

だが、このように整備が進んだ一方で、その路面は相変わらず雨が降ると一面の泥濘のままであり、山地の難所も明治に至るまで解消されなかった。さらに冬には、あちこちで「牛馬不自由、大雪之時ハ不通」という状況が毎年繰り返されていたのである。

主要街道である奥州街道ですらこうだったことを思えば、他の街道の状況は想像するに難くない。そのような山あり谷ありの細道を一歩一歩踏みしめて往来した古人の旅を思うと、現代の旅とはまさしく隔世の感がある。